

## 私の願う図書館像：仏法と人間探求の宝蔵

教授 築山 修道  
(比較思想・国際文化学)

私はこれまでに国内外のそんなに多くの図書館を見学したり利用してきたわけではないが、今停年退職を前にして、とりわけ「大学図書館」についての感想や願うところを少し記してみたい。

元来、大学図書館というものはその大学の心臓部とも頭脳ともいうべきもので、図書館を見ればその大学がどんな大学であるか大略見当することができると言われてきた。つまり、大学図書館は大学の建学の精神、教育・研究の理念と目的、創立以来の歩みなどその大学の根本性格や全体像を反映するものであるということであろう。それゆえ、欧米の大学などではとくに図書館の充実ということに力が注がれてきた。そしてとくに学生の場合には、勉強するのは「図書館で」という意識や習慣がすっかり定着しているように思われる。また、日本においても伝統のある大学は欧米のそうした基本理念に学び、大学図書館の充実に努力を傾注してきた。とりわけ、人文系の学部・学科をもつ大学はその方向で大学における教育と学問の発展を図ってきたと言ってよいであろう。

ところが、日本においては戦後、とくに1970年代以降の高度成長期以来今日に至るまで、理工系並びに実学系の四年制大学や短期大学が急増するに伴って、新設のそうした大学・学部は従来の大学とはその理念を異にし、そこにいわば「大学の産業化」ともいべき現象が生じた。その結果、図書館は必ずしも大学の心臓部でもなければ、個性や全体像を映すものでもなくなり、したがって大学と図書館の関係も従来とは相異し、また大



学全体における図書館そのものの地位や役割・機能なども以前のそれとは必然的に変化せざるをえなくなったとも言えよう。それに加えて、近年のIT化の進展は図書館の電子化を一層促進させ、図書館本来の理念やあり方そのものを一変させるほどの大きな変革をもたらしている。こうした趨勢の中で図書館はますます多様化することが予想されるが、大学の図書館が今後どのように変化していくにしても、大学図書館には少なくとも二つの大きな役割・機能と意義が求められるであろうし、また私はそのことを大学図書館のあるべき像として願いたい。

一つは、大学図書館はその大学が設置する学部・学科の教育と研究に必要な情報を入手しうるだけの蔵書・諸資料を所有していることが望まれる。とはいっても、「必要な情報」とは何か、またそれを如何ほど所蔵すればよいかなどの問題は絶えず存在するのであって、それらは個々の大学の規模や財政的制約によって実際には決定されている。しかるに、この種の問題は基本的には「情報の量」に関することであり、さらにはそれと連動した図書館の規模や施設・設備に関わる事柄で

ある。そして一般論から言えば、こうした問題については、現代の大学の事情を考慮するならば、各大学において可能な限り時代的・社会的動向に対応した蔵書数の充実、種々の環境整備、サービスの向上・改善などが図られるべきであろう。こうした観点から、私が今までに経験した最も印象深い図書館は英国ケンブリッジ大学の大学図書館 (University Library) である。私は1994年4月から一年間当大学図書館の使用を許可されたのであるが、その広大さと蔵書の充実、サービスの質の高さなどに度肝を抜かれたことを鮮明に記憶している。しかし、そうしたケンブリッジ大学の図書館といえども、必要な文献・資料が必ずしも十分に所蔵されているわけではないであろう。また私にとっては、広大すぎたがために、利用し易かったとも言い難いのである。

大学図書館に要求される他のもう一つの肝要なことは、総じて情報の量に関わる規模の大小、設備・サービスなどの充足度とは別次元の、いわば図書館自体の質に関わる要件であろう。私の経験では、ケンブリッジ大学の King's College Library がそうした図書館であったように思われる。それは、図書館が大学の心臓部であり、建学の精神と教育・研究の理念・目的を反映すべきであるという類の事柄であって、その大学独自の個性がそこに具現され象徴化される処であるという問題である。具体的に言えば、たとえば、大谷大学図書館とは何か、如何にあるべきであるかという問題意識に関わることである。大谷大学は仏教精神、とりわけ真宗の教法に基づく大学であり、かかる観点から広く深く人間探求を遂行する学場であるとするならば、大谷大学図書館は実際にそのことを具現すべき図書館でなければならないであろう。つまり、幾世代にも互って先人たちが心血を注いで究明せんとしてきた仏教の真理と、東洋西洋の両世界において遂行されてきた人間探求の果

実がそこに蔵されている処である。それゆえにそれは、単に種々の情報提供の場ではなく、仏教との出遇いや人間の真実、さらには真の自己への覚醒を可能にする場処とならなければならないであろう。象徴的にいえば、大谷大学図書館は「仏法と人間探求の宝蔵」となるべき処であろう。

私は大谷大学図書館がそうあって欲しいと願うものである。